



TITLE:

降旗竹子氏を悼む

AUTHOR(S):

CITATION:

降旗竹子氏を悼む. 天界 1930, 10(113): 331-332

ISSUE DATE:

1930-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161557>

RIGHT:

即ち同勢十二三人で山から7哩程の Smith Creek へ泳ぎにいつたのである。そこには幾組が夏休みのため、テント持ちで出掛けてゐる 連中で賑はつてゐた。獨立祭にはつきものゝ花火も 山では法度であるが、こゝでは日がいつてから子供達が花火に興するやら、メンゼルの バンジョウで歌ふやらで歡をつくし、九時すぎて歸つて來たのである。

こんな風でリツクの生活が至極順調に愉快に始められたのを 自分達のために喜んで頂きたい。尚ほ昨夜の觀覽日の有様を書けば complete であるが、もう食事の時間が來たので又の便に譲らせて 頂きたい。只、食事のことで附加したいのは、この山では獨身者や我々の如き客分は dormitory にゐて、食事は毎食 boarding house の Mrs. Corona の家へゆくことになつてゐる。コロナといふ名前からして珍らしいでせうが、こゝへ來る連中は Dr. Paddock が host 格で、Secretary Miss Potwin, Computer の Miss Jones, 研究生の Miss Slocum Mr. Whiffle, 人夫頭兼大工の Osen 君、それと我々夫婦です。

七月六日

上 田 穰

Lick Observatory, Mt. Hamilton

降旗竹子氏を悼む

六月十九日に會員降旗竹子氏が永眠された。氏は此三月に同志社女專の英文科を卒業したばかりであつたが、有爲なる素質と理想を懷抱し乍ら空しくなつた事は本當におしく思ふ、卒業後の就職希望は天文臺の助手になる事であつたが、その方の話が未だ進捗しない内に病氣になり、郷里に歸つて三月廿五日に入院されてから、最後迄ずっと39°前後の發熱に苦しめられ乍らも、よく信仰に徹し其臨終は本當に立派なものであつた。私が支部幹事の資格に於て京都からわざわざ 信州の松本迄彼女の病床を訪ねたのは六月十一日でした。私達は久し振に色々特に天文學の事など話し合ひましたが、別れるに際して彼女の殆ど唯一の傳言は在學中の友人に對して、

「天文同好會をしつかりやる様に」¹といふ事でした、彼女は女專での最初の會員でしたが又最も忠實な會員でした。同級だつた工キヌさんからの手紙の一節にも『……同志社に居る時、星を見た人、星といふ語を耳にした人はきつと降簇さんを思ひ出すにちがひない。それ程あの方は星好きだつた。私は勿論私達の仲間では星を知る人は皆あの方から教へられたものです。あの方の一番愛してゐらした星は、秋に出るかわいい星團プレヤデスでした。あれが沈む頃私達はよく寄宿舎を抜け出して校庭にあの星と名残りをおしんだものです。或夜など徹夜して星を見るとか云つて電柱の所に立つてゐて泥棒と間違へられたりしましたが、これも今は悲しい思ひ出の一つです……』又、氏を中心にして工さん吉武さんなどの仲のよさは見てゐても嬉しいものでしたが、同好會の目的である會員の親睦、星を通じての友情といふものがこんなに迄も美しく結ばれるものかと感心してゐました。

又、氏の永い遺言を最近私はお母さんから爲き送られましたが、随分感動させられました。それは如何に彼女が天文學に對して深い關心と愛好を持つてゐたかを物語るものでした。彼女の大切にしてゐたといふ天文日誌や天文關係記事のスクラップ等は未だ見てゐませんが、そんなに迄も好きなのなら、そしてどうせ死ぬるものなら松本へ見舞ひに行く時に山本先生から『花山天文臺の助手に任ず』とでも云ふ様な辭令を貰つて行つてやればどんなにか喜ばせることが出来ただろうにと可哀そうに思つてゐます。父なき後の姉として、弟妹に訓言してゐる所や、せつかく勉強し乍ら何等の社會奉仕も出来ず仕事も残し得ないで死ぬる事を悔んでゐる所など、さすがに Doshisha Girl だと思はせられました。彼女の愛唱は讚美歌 292 番でしたが今頃は『主イエスの御胞によりて慰ひつゝ、』そして一多くの友人にそう感銘を與へてゐる様に一愛する星を通して地上には、笑みかけてゐる事と思ふ。(飯しるす)